

人の役に立つ存在！体験的自覚！

●経営革新塾しよう会講演会／その5

9月20日夜の認定NPO法人シーエスアールスクエア理事長の宍戸仙助様のご講演「リタイヤ後は、利他Years！～東南アジアの山岳少数民族の子どもたちの輝く瞳に学ぶ～」の続きを綴りましょう。

◇ ◇

◆日本の子どもたちの支援 【写真はご講演の内容に沿って香田がネットから引用したものが 있습니다】

ラオスのチャンヌア小学校で、乾季になると渇水してしまう井戸の話が帰国後に全校集会でやってしまったのです。そうしたら翌日の朝、校長室の扉を叩く子が子がいるのです。コンコン、コンコンと、ガラッ、「あっ、あかねちゃん、どうしたのおはよう」、すると「校長先生、これで井戸を掘ってあげてください」と、ブタの貯金箱を持っているのです。「それで井戸掘るの?」。そして後ろを見たら、男の子が千円札を持って立っているのです。さらに後ろには、小学校2年生くらいの女の子が郵便局の貯金箱を持って立っているのです。バカなことを言っちゃったなあと思ったけれども取り返しがつきません。もう掘るしかないと思って掘ったのが、この井戸です。

井戸は乾季に掘らないといけないのです。雨季に掘ると水位が高いですから、乾季に掘ればずっと出続けます。雨季に掘ると水位が高い状態ですので、水位が低くなる乾季に水が出なくなってしまいます。この写真は、井戸を掘り直して水が出るようになって喜んでいる写真です。

次はカンボジアで撮った写真ですけども、これしか飲む水ないんですよ。私はまさかこの水を飲んでいるとは思わなかったのですが、家に持って行って、ミョウバンのようなものを入れて沈めて上澄みを取ってそれを沸騰させて飲んでいるのです。こんな水しか飲むことのできない子どもたちが世界中に何億人っているんですよ。

◆QOD【クオリティ・オブ・デス】

今、世界の人口は80億人を超えています、中国が14億8千万人、インドの人口が14億2千万人くらいで、間もなく中国を抜くだろうと言われています。でも、あのインドでトイレのない家に住んでいる人たちは何人くらいいると思いますか。6億7千万人ですよ。14億人のうちで6億7千万人の人がトイレのない家に住んでいるのですよ。何処でしているのかというと、野原でしているのですよね、当然。または水たまりを作って橋げたを渡してね。人間のウンチというのは、栄養分があるので、昔は中国にブタ便所というのがあって、人間のウンチをブタが食べていたという時代もありました。

利他を求め、いつまでも夢と希望を育み育てること、それが私は「クオリティ・オブ・デス＝死ぬまで幸せであること」ではないかなあと思っています。後ろに鯉のぼりがあるのですが、震災の直後に7mの大きさの鯉のぼりをラオスやベトナムに持って行くのですが、山の中の学校でも12年前の東日本大震災をちゃんと知っていて、鱗の空いているところに励ましのメッセージを書くから持って帰ってくれと言われます。

その時の動画を見てください。〔福島テレビの映像紹介〕。

「伊達市の小学校では絆の大切さを伝える特別授業が行われました。福島の子どもの声の世界に届ける鯉のぼりも披露されています。(宍戸)『日本の子どもたちがこんなことで大変苦労してるよ。そんなことを届けてくれたのは、世界中のNGOというところで働く人たち』。特別授業は来月6日にラオスで開かれるNGOの国際会議を前に企画されたもので、2匹の鯉のぼりが飾られました。一つは、震災や原発事故に見舞われた福島で暮らす子どもたちのために、東南アジアの子どもたちから送られた復興の鯉のぼり、もう一つは、そのお礼に作られた鯉のぼりです。そこには伊達市や飯館村の子どもたちおよそ180人の感謝のメッセージが書かれています。(佐藤君)『ラオスの人たちがこ



写真はチャンヌア小学校で掘り直した井戸【AEFAのHPより引用】



写真はカンボジアの子どもたち〔〕READYFOR「85%の人が待つ“透明”な水。カンボジアの地方に安全な水を！」より引用



写真は会場に飾られた「鯉のぼり」と「龍」。鯉のぼりには現地の子どもたちが書き込んだメッセージが



っちを思ってくれていて、とても嬉しく思いました』。(宍戸)『子どもたち元気になってきているぞ、心にある意味の火が灯り出したぞ』。お返しの鯉のぼりは国際会議に出席する校長先生が福島県や伊達市の現状を紹介することになっていて世界各国に福島の子どもの声が届けられることになります。」実際には3つの鯉のぼりがあって、1つはベトナムの子どもたち、1つはラオスの子どもたち、もう1つが日本の子どもたちのメッセージが書いてあるのです。佐藤君は後で出てきます。

その時に、ベトナム中部のレバンタム小学校で募金活動が行われるのです。これは、ベトナムのお金で1,000ドンです。この1,000ドンは都会の子どもにとっては当たり前のお金かもしれませんが、山の中の子どもにとっては年に1回しかもらえないお年玉なんです。実は日本円にすると大した金額ではないのですが、その1,000ドンを子どもたちがそのまま募金箱に入れているのです。いや～泣けちゃいますよねえ。それで、この1,000ドンを募金できない子どもは何を持ってきたかという米です。ラオスやベトナムの山の中の子どもたちにとって一年中食べられる米はありません。せいぜい9か月分なのです。だから、山に登って木の実を採ってきたり、川に潜って魚を採らなければならないのです。にもかかわらず、「お父さん、お母さん、お米ちょうだい」「それを持っていったら、あんたのお替わりは出来ないよ」「いい、我慢する」「あんたはいいかもしれないけれども、お兄ちゃん、弟は、おじいちゃんやおばあちゃんに聞いた?」「みんないいって言ってくれた。今年だけだぞって言ってくれた。だからちょうだい」「本当に今年だけだからね」というようなことでもらってきて米を持ってくるのです。お米も出せない子は鶏です。アヒルです。いや～、泣けて泣けて泣けてです。もちろんお米、鶏、アヒルを日本に持って来ることができませんので、市場に行って売りました。ここに49万2,500ベトナムドンあります。



これを日本円に直すと、1,970円です。今日でこの話は558回目なんですけれども、この話だけは1回も欠かしたことはありません。私は日本中の何処に行ってもこの話をします。そして、聞きます「これって、たったの1,970円ですか?」。もの凄いい心の籠ったお金なんですよ。1年に1回しかもらえないお年玉であり、家族が1年間我慢したお米であり、家族みんなで食べるはずだった鶏やアヒルなんです。

何故、東南アジアの子どもたちは輝いていられるのか。**「その瞳の輝きのわけは、自分は家族の一員であり、人の役に立つことのできる存在であるという体験的自覚」**を持っているのです。あの子供たちは、自己肯定感と自尊心がなければだめですけれども、妹や弟を世話しているのは自分です。自分たちが世話しなかったら、お父さんやお母さんは働けないのです。魚を採ってくるのは自分たちです。ちょっと大きいだけで、一匹多いだけで「おお、今日のご馳走だなあ」と称賛され、「やったー、ぼく採ってきたんだもん」。ゴーストなんて無いですよ。もの凄いい濁流の中で、溺れて死んだ子どももいます。木の実、きのこ、木の根、野生の動物〔ヤマネコ?〕を獲ったって道路に立っているのですよ。子どもたちが

「買って、買って」ってね。お母さんが背負っている木は、濡れている流木で私は重くて背負えませんでした。乾いていると持っていかれてしまうので、濡れたままの木を背負っています。この子の背負っている木、私この子の肩に手を入れてみました。紐が肩に食い込んでいるのです。この女の子は、井戸がないので遠くの川から水を運ぶのです。私も一緒に行ってみました。「まだ?」「まだ」と繰り返して遠いんです。暫くして「ここ」と言われたところは、川が7mの崖の下です。階段もロープもない急斜面を下りて、そこから1日7回も水を汲んで運ぶんです。家族のために。それが、この女の子の仕事です。誰も手伝ってくれません。雨が降っても風が吹いても、雪は降りませんが、途中でこぼしたら戻るしかないのです。崖の途中でこぼしたら自分が滑るのです。この子どもたちは、自分が家族の一員であり、人の役に立つ存在であるという体験的自覚を持っているのです。

これは現地の子どもが織った布です。ちょっと大きな子どもで小学校5~6年生でしょうかねえ。おばあちゃんから教わって、たった1枚の織り方です。色を変えることはできますが、柄を変えることはできません。体の大きい子だから織れるのですけれども、こちらは体の小さい子ども、2~3年の子どもでしょうか。腕が短いのです。ですから、よく見ると半分から縫い合わせてします。この幅を折るのに3か月から4か月かかります。これは2枚分ですから半年から8か月かかって織るのです。これを現地の仲買人がいくらで買っていると思いますか、日本円でたったの80円です。でも、仲買人が来るころはいいです。《つづく》